

女殺油地獄

木谷蓬吟

〈出典：『大近松全集』第8巻、大近松全集刊行会、大正11年11月〉

(一) 興行的声価と芸術的価値

近松は此作の前年（享保五年）には『天網島』を描き、翌年（七年）には『宵庚申』を著したのを、最後の世話物と残して同九年に歿去した。即ち此戯曲は、所謂最晩年に於ける三名作の一つと云ってよい。殊にその内容の近代的色彩を帯びた、一種鋭い痛切な人生の調子が描き出された点に至っては、巢林子のあらゆる作品中、群を抜いた逸品だと推称するに足りる。無論他の各作家等の未だ嘗て試みなかった所であり、且は彼等の到底夢想だに及ばなかった芸術境であった。

然かし！ この作が、芸術味に富んでいただけ、興行上の功果は余り良好ではなかったらしい。本来が他の心中物その他の世話曲とは全く趣を異にして、色気艶気と云ったものが皆無であり。不自然な入り組んだ家庭を中心にして、それが産んだ半獣性の放埒児が主人公であったり。女殺しの所謂油地獄と云う恐ろしい惨劇が描かれたり。そして全齣の脚色が単純で、観た目の変化に乏しい事などが、当時の一般に向かなかつた所以であろう。この頃、近松の作品が大阪の操芝居にかけられると、直ぐと江戸の劇壇に移されて、いつも市川団十郎に由って上演されたのは興味ある現象であった。先きには『曾根崎心中』、後には『天網島』『宵庚申』なども東の舞台に歌舞伎となって表われたが、其間にあつて、この『油地獄』だけが採り除かれていたようである。これで見ても余り評判は好くなかつたと想像される。只、大阪中の芝居で、竹島幸左衛門の一座が、油屋を酒屋に仕替えて上場し、佐川文蔵が与兵衛に扮し女房殺しを演じたと云うことは、この作の本文にもある通りである。

其後の各時代を通じて、この作が再演三演されたと云う記録は見付からない。それで『冥途飛脚』を賞し『天網島』を讃歎する者はあるが、『宵庚申』を論じ『曾根崎心中』を説く者はあるが、『油地獄』に至ってはウンともスンとも云う者がなかつた、二十四曲の世話曲中にも凡作の部に投げ込まれていたこと年久しかつたが、明治となり大正と進んで、俄に復活されて歌舞伎又は新派劇の舞台に上され、文壇評論の俎上に持ち出されるようになって来た。これが即ち、此作品の一部近代思想に共鳴する点があるからである。

(二) 野崎詣りや山上詣りの風習風俗

この作も例の通り、市井の小出来事を材料にして、神変の霊筆を呵したものである。その事実とは、与兵衛と云う放蕩息子が継父や実母の盲愛に甘えて、我が儘のありだけを尽くし、店の売上金を持ち出しては色里に注ぎ込み、果は廓の金に詰って動けなくなつたところから、同業の手島屋の女房お吉に金の無心を言ったが、拒絶されたので遂に自暴自棄になってお吉を殺した……と云う通常ありふれた殺人犯を採つたに過ぎなかつた。

例に由って此事実、其時節の景物や流行ものを配して、舞台効果を拡大している。上巻には野崎詣り、中巻には山上詣り、下巻には端午の節句に節季など、巧みに塩梅されている。

大阪の東、北河内郡の俗に野崎の観音詣りは、名高い年中行事の一つであって、大阪あたりからは淀川伝いに参詣やら遊山やらの群集が、殆んど絶間なく続いた程の賑わいを呈した。殊に此年（享保六年）は、三年引き続いての開帳があったと云う事実を、其儘に採り入れたのも如才のない手法である。そして野崎詣りの名物と称せられている陸の人と船の人とが罵り合う奇習を捉えて、与兵衛等と会津の客との争鬪に転用して、一層野崎詣りの情調を濃厚に色づけている。本当の信心詣りよりも、綺羅を飾った若い男女の二人連れが多かったことを、『行くもちんづ（二人連れのこと）帰るもちんづ、又来る人もちんづ云々』の唄で説明しているのも、当時の実況を写したものである。お吉が茶店に憩みながら往来の群集を眺め、『アレアレ彼処へ桔梗染の腰変り縞縹の帯、者ぢやはいの者ぢやはいの、ソレソレそこへ島縮に鹿子の帯、たしかに中の風と見た云々』の品評も、繁昌な野崎街道を織って行く婦人風俗の描写で、微細な点にまで背景的情味を漲らせた用意の程が窺われる。

中の巻、河内屋の店先へは、これも当代大流行の山上詣りの仕出しを賑やかに使っている。山上詣は大和大峯山に登山参詣する事で、男に生れて山上せぬ者は人間でないともまで諺にも言われている程に、随分盛んに行われたものである。町家の若い者達が講社を組み年々に山上する、白衣に金剛杖をつき、腰に腰当、首に数珠、法螺を吹いて、『ぎやていぎやてい、はらぎやてい云々』の呪文を唱えつつ、滞りなく参詣をすまして、皆々我が家へ帰って来る。ある意味からは難行苦行を首尾よく了って帰着した凱旋軍のような、雄々しい嬉しい心持で、早く妻子の無事な顔を見たいと、河内屋の店へ一寸寄って直ぐ別れ別れに帰って行く。この光景を中巻の劈頭に描き出して、北船場の油屋の店先に、一味の情調を点加している。独り此曲に限った訳でもないが、作者はいつも幕開きの『気分』『感じ』に少なからぬ苦心を払っている。この場の冒頭の『山上詣』の情景と、この場の筋とは何の関連もないようでありながら、而かも不即不離の間に、連鎖の糸が繋がれているようなのが、なかなか興味がある。これあって、なまくら法印の祈禱や、偽りの物の怪女や、与兵衛の乱暴狼藉なども層一層生きて来るようにも思われるのである。

（三）義理と恩愛の人情劇、政太夫の妙技

女殺しの犯人油屋与兵衛の家庭は随分入組んでいた、継父の徳兵衛は先代の主人に使われていた雇人であったから、親とは云いながら先代の遺子与兵衛に対しては何かと遠慮勝であった。それに付け込んで与兵衛は気儘のありたけを尽くした。河内屋の内で加持祈禱にやって来た白稻荷の法印を、座敷から突き落したり、病気の妹を踏み倒したり、継父の徳兵衛を蹴飛ばし踏み付け、果は実の母を枋でぶん擲ると云う言語道断の乱暴を働いている。遂には実母に追い立てられ、しぶしぶながら勘当された我が家を後に出て行くことと

なる。その後姿を、つくづくと見送っていた徳兵衛は、ワッと叫んで声を上げた、『あいつが顔つき背恰好、成人するに従ひ、死なれた旦那に生写し、あれあの辻に立たる姿を見るに付け、与兵衛めは追出さず、旦那を追ひ出す心がして、勿体ない悲しいはいの』とどうど伏し、人目も恥じず泣き倒れると云う条は、余りに愚直な徳兵衛と思いながらも、知らず知らず引き付けられて同感せずには居られない。

継父徳兵衛が先代主人の恩義を第一と肝銘して、その忘れがたみの与兵衛に対しても、亡主同前の尊敬を持っていたから、踏まれても打たれても尚お与兵衛悪しかれとは夢にも思っていなかった。実母とても、後の夫徳兵衛に気を兼ねて、与兵衛を勘当までしたものの、心の中では放蕩者ほど余分に可愛いくて堪らなかつた。この二人の表面を包む心の奥が計らずも暴露した悲劇は、中の巻手島屋お吉の内の段に描かれている。

今日は節季、明日は目出度いお節句と云う宵の程、手島屋へそっと来たのは徳兵衛、お吉を頼んで、若しも勘当の与兵衛が来たら、父親は合点、随分母に託言して二たび内へ戻るように、意見してやってくれと願ひ、『これこの錢三百女房が目顔を忍び、つい懐へ入れて出た、与兵衛めがうせたらば追つ付け暑気に赴く、さつぱりと肌のもでも買ひをれと、ゆめゆめ我等の名を出さず』然る可く頼み入ると、差し出す後の門口、お吉様お仕舞いかと訪ずれるは女房お沢、驚く徳兵衛の様子を見て、『又与兵衛めが事くやみにか、この三百の錢のらめに遣るのか、その甘やかしが皆毒害、此母はさうではない、サア勘当といふ一言口を出るが其れ限り、紙子着て河へ陥らうが』如何になろうが気にも懸けぬ、サアサア帰なしゃれと引立てる。ハテ去るなら連れ立とう其方もおじゃと引立て争う途端の拍子に、母の懐から板間へガラリと、粽一わと錢五百が落ち散った、『なう情けなや恥しや、徳兵衛殿真平許して下され、是は内の掛の寄り、与兵衛めに遣りたい計り、私が五百盗んだ』と、我身を蔽い押隠し声を上げて泣き倒れた。義理と恩愛、老夫婦が盲目的の間違った愛とは云いながら、子を思う偽りのない真情には、思わず泣かされずには居られない。斯うした人情の機微を語り活かす事に、始めて新生面を開いた初代政太夫（二世義太夫後に播磨少掾）が、能く作意を諒解して其口にかけてのであるから、後のお吉殺しの一齣と共に、屹度芸術味に富んだ語りぶりを發揮したに違いない。然しそれだけに又、作者や太夫よりも遙に遅れて居た一般聴衆の耳には、或は透徹しなかつたかも知れない。現代の世に、よし巢林子が在不在としても、せめて一人の政太夫が欲しいものである。

（四）油地獄女殺の惨劇と、追いつ逃げつの連鎖劇

お吉の手島屋は与兵衛の河内屋と同業で油の売店であつた。夫は掛金取りの留守、三人の娘を蚊帳の中に寝させたところへ、徳兵衛夫婦が訪ずれての経緯があつて、二人は帰って去った後、表で立聞きしていた与兵衛が、フラリと入って来る。与兵衛は親達の慈愛に心動かされて、後悔の念が頭を擡げて来た矢先、明日限りの二百匁の金が調わねば父親に迷惑かけるを、真実済まぬと考えていた。その金の調達を、お吉に縋つて頼もうとしたの

である。お吉は、今し方両親^{がたふたおや}が置いて行た錢八百^{ちまき}粽一わを、それと明さず与兵衛に遣つて、親の慈悲を説きいろいろ言葉を尽くして意見すると、いかにもいかにもよう合点しましたと云い『只今より真人間^まになつて、孝行^{かこう}尽くす合点なれども、肝心お慈悲の錢^{ぜに}が足らぬ、というて親兄には言^まれぬ首尾、茲には売溜掛の金もある筈、新でたつて二百匁計り、貸して下され』と頼む、『それぞれそれ、どこに心直つた、その無心が即ち嘘の証拠』とお吉は言うた。『夫^{おつと}の留守に貸すことはいかないかな、いつぞやの野崎参、着物洗ふて進ぜたさへ、不義したと疑はれ、言訳^{いわけ}に幾日かかつたやら、なう疎ましや疎ましや』と云うほど傍へにじり寄つて『不義になつて貸して下され』と、平常の傍若無人な放蕩児通有な露骨性が食み出される、お吉がムツとしたのも無理ではない。而かし与兵衛は何処までも真面目であつた、更に赤心^{まごころ}を籠めて懇願した『実は自害の覚悟で、脇差^{わきざし}差して出は出たが、只今両親の歎き御不^{びん}便がりを聞いては、死んで此金親爺^{おやじ}の難義に掛くること、不孝の塗り上げ、思へば死ぬるにも死なれず、生きてはゐられず、たつた二百匁、有る金なら貸して下され、与兵衛の命を繋ぐ御恩』と、お吉も誠意を其目色に見ては取つたが、或は又例の偽りの手と思ひ返えして、一向に信じなかつた。『天網島』の治兵衛が、二一天作式の日常^{にちじょう}の虚言^{うそ}が藁^たつて、真剣に言うことも常が常とて信ぜられなかつたのと同軌で、これも遊児に通有の損な立場が相当同情を以て写されている。この間のお吉と与兵衛の対話応答は、サラサラと書き作^なされていて、而かも其内容に、与兵衛の真剣が日常^{にちじょう}のぞんざいな言葉に蔽われて横路^{よこみち}に外れたり、お吉が夫^{おつと}の疑いを憚り、与兵衛の言の真偽を思ひ煩ろうたり。心理の錯誤、感情の間隙から、与兵衛が遂に窮鼠の暴慮を逞^{たく}うして殺意の決心をするまでの複雑な、そして刹那的な感情の激流が、工^{たく}まずして描きこなされている。

お吉は樽に油を量り入れる可く、油売場に立つた、淡い灯火にもキラリと映る刃の光りにお吉はビックリ、『今のは何ぞ与兵衛様』『イヤ何でもござらぬ』と脇差を後に隠す、『ソレソレきつと目も据つて、なう恐ろしい顔^{がんしよく}色、必ず傍へ寄るまい』と後退りして寄門^{かど}の口『出合へ』と叫ぶ一^{こゑ}声、二声待たず飛びかかつて引絞^{ひきしぼ}め、喉^{のど}のくさをグッと刺す。お吉は惱乱手足をものがき、助けて下され与兵衛様、今死んでは年端^{としは}もいかぬ三人の子が流浪する、それが可愛い死にともないと泣き叫ぶを、引き寄せて、右手^{みぎて}から左手^{ひだりて}の太腹^{ふと}へ、突刺してはえぐり、抜いては又切り付ける。『お吉を迎ひの冥途の夜風、はためく門^{かど}の幟^{おと}の音、煽^{あを}ちにし売場の火も消えて、庭も心も黒闇^{くろやみ}に打ちまく油流るる血、踏みめらかし踏みすべり、身内は血潮の赤面赤鬼、邪見の角^{つの}をふり立てて、お吉が身を割く剣の山、目前油の地獄の苦痛^{くるしみ}』お吉を殺し、提^きげた鍵^{かぎ}を取つて、『のぞけば蚊帳^{かや}のうちとけて、寝たる子供の顔付さへ、我を睨むと身も震へば、つれてがらつく鍵^{かぎ}の音、頭^{かうべ}の上に鳴神の落ちかかるかと肝にこたへ』血と油の流れて河をなす油売場に、女殺しの凄惨な光景が遺憾なく活写されている。殊に蚊帳をのぞき込んだ一刹那に、殺人犯人の恐怖に充ちた心理が切実に描かれている。

薄氷を踏み火焰を踏む心地で、この惨劇の場から逃^{のが}れた与兵衛は、『沈む来世は見えぬ

沙汰』と、喉元^{のどもと}過ぎては暑さを忘れて、奪^とっただけの金^{かね}を又色里に注ぎ込むこととなる。伯父の森右衛門は与兵衛の身上の危いのを見越して、身を忍ばせ命を助けてやろうと与兵衛の行く先き先きを尋ねて廻る。与兵衛は又、伯父に見付かつては難義と、それからそれへと逃げて廻る。廻り燈籠のように追いつ逃れつする連鎖劇が、新町の段、曾根崎の段と転々して移って行く（見物はハラハラする）と云った脚色も新しく面白。

（五）此作を通じての教訓暗示と其標語

この作は、当時実際の出来事を捉えて、一編の骨子に用いたのではあるが、それが単純な事実の潤色とばかりではないようである。これに由って作者が当面の所感や思想を編み込んだものと思われる。例えば、与兵衛の半獸的個性の描写と云い、彼が最後の意味ある告白と云い、中産商家に有り勝な不自然な家庭の写実と云い、只無意識に走筆したものだとは考えられぬ。諸先学者は、斯様に思うのは読む者の力負けで、作者は別段用意なしに、新聞の三面種^{ぞうね}を扱うほどの考で筆を執ったものであろう云々と云われているが、私には左様^{さう}は思われぬ。既に屢々言う通り、近松が作境に格段の進歩を見せたのは『天網島』で、これが在来の作の心中物^{ちゆうぶつ}とは異^{ちが}って、名は心中物にして更に未だ試みられなかったある物を目指して描いたことは、同作の解説条下に叙べた通りである。それに引続いて此の『油地獄』が出来、次に『宵庚申』の絶筆（世話曲の）となったので、以上三大作品は作者が在来の用意とは異った方面に、創意の筆を着けた新事実を、雄弁に語っているものである。

此作に観ても、与兵衛の惨劇を単に惨劇としてのみ取扱うたものではなく、その原因を半獸性の与兵衛が自ら求めた罪と、一つは不自然な不理解な家庭が生んだ罪過の結果に由るものとしているらしい。そして此一編に含まる複雑な情意的の教訓？ 暗示と云ったものが頗る豊富である。これを一々挙げるるとは多くの紙面を要するゆえ、茲には不充分ながら其標語とも云う可き数句を連ねて、ホンの概念に訴えるに止めて置こう。要するに、徳兵衛夫婦の上には『盲目的の愛に奔る親』『子を導くことの出来ない親』『主恩の小義理^{しよ}に縛られて親としての大義を自覚しない親』『家庭の主としての理解を持たない親』『商家の家庭に蟠る相続制度の欠陥』と云ったものが表わされて居り、与兵衛の上には『甘やかし子の運命』『我儘気儘にて自分以外の世間を知らないおボンチ』『直接に制裁される腕力や法律には恐れるが、間接又は無形の徳義や、義理人情は顧ないで、獸的蛮行を敢てする暴漢』『神様より仏様より捕手^{とりて}の役人が恐ろしいと云う男』と云ったものが描かれている。そして此獸のような放埒児が、ある動機から親の慈悲ということを知り、孝行の大事であることを覚ったが、その目的を達する為めには手段の如何を問わなかった。孝行の為めなら人を殺すもさのみ大した悪事とも思わなかったと云う、この心理の機微^{ほんきく}を捉えて本作品の眼目に一睛を点じたあたり、作者の解釈の那邊にあるかが窺い知れよう。亦以て近松が着想上の転境を研究するの好資料と云ってよい。

(六) 大阪人及び大阪の家庭の写実

この曲の有する一面の特色は、彼の『天網島』『宵庚申』などと共に、大阪人及び大阪商家の写実と云うことである。ここには此題目下から観た与兵衛、徳兵衛、お沢、お吉と云うものを説明する。

年若い我儘者の与兵衛は、元禄の大阪が生んだデカタンである。自我に強く向う見ずで、我欲の外には何物も見えない……親も他人も社会も道徳も、義理も人情も……凡てを自分本位で勝手のよいように解釈するのが能であった、それで何処までも世間知らずの『おぼんち育ち』なのが彼の特徴である。そして色里に入り浸る放蕩児の常として、伊達衆ぶると、店の売上を盗み出すまでの事で、それ以上に大した悪人でもなければ奸物でもない。家庭では馬鹿に強いが、外では案外強くない、向う行きは強そうなが、先きの腕力が強いと見れば一とたまりもなく怖れ上ると云った風で、斯うした性格は大阪商家に甘く育った『おぼんち』の通有性である。(野崎にて、森右衛門に切られると予想して恐怖し、こう行けば野崎、大阪は何方やら方角がないと狼狽し、河内屋内にて、町中寄せて追い出すと嚇され、町中の一語に吃驚して出て行くなど)東京の某近松通の大家が、与兵衛の役の扮本を、『平仮名』の平治、『薄雪』の団九郎に採ればよいと某俳優に教えたところがあるが、それは荒事式の眼から眺めた性格錯誤で、大阪商家の産物である『おぼんち育ちの放蕩児』に、思い及ばなかったためであろう。

『天網島』の治兵衛の如きは、色里に耽溺はしながらも、他の一面には非常に店の信用と云う事に、神経質な商人気質が描かれてあり。『宵庚申』の半兵衛の如きは、商人と云う境界に比べて厳格な武士道の徳義の観念が勝っていて、それが為に煩悶する男に描かれてあり。又この作の与兵衛の如きは、おぼんち肌の、のぼんと生長きくなった我儘一匹のデカタンとして描かれている。以上三様三態ではあるが、古今を通じて大阪商家の産物であることは一致した争われぬ事実である。

継父の徳兵衛は、温厚篤実の人で、先代(与兵衛の父)に仕えた雇人の成り上りである。それで放恣三昧の与兵衛に踏まれ蹴られても沈黙して耐えて居ると云う、先代に対しては忠義な下男かは知らぬが、人の親としては無理解千万の人である。故に与兵衛はいよいよますます増長する。与兵衛のような男を拵えたのは、一つはこの不自然な——下人が親になり上る——家庭の風儀の罪でもある。而かも此風習は由来久しい大阪商家の因襲になっている。家の大黒柱、商いの心棒たる主人が死んで、女や子供ばかり残して逝った場合に、その家業を継ぎ糊口を凌いで行くには、永年家業に馴らされた使用人を引き上げて未亡人に添わせ、そして遺児を養育さすと云うのが、最良にして最便の方法として信じられていた。それが為に一面には、複雑な隔てのある家庭、不自然な家族制度の犠牲となつて、種々の悲劇が湧いて出たものである、その一つの例を示したのは此作である。

与兵衛の母お沢は、常套の盲目的慈愛に陥り込んだ、やさしい情け深い母親になっている。現在の夫に対してのら息子の非行を、絶えず遠慮気兼ねをしながら、放埒な与兵衛を影になり日向になり庇うて居る。これが又罪の子を作り出した一つの原因ともなっている

た。勘当して追い出した息子を『立派好きの奴、祝ひ月なれば鬢付元結など要らう』と心配し、『生肝を煎じて飲ませと云ふ医者あれば、身を八つ裂きも厭はぬ』とまで言っている。斯うした盲愛の母親は、殊に大阪の商家に多く見られた扮本である。

手島屋のお吉は、スッキリとした奇麗な、紙治のおさんと同一線上に立ったような、伶俐な商家の世話女房に出来ている。絶えず河内屋夫婦の頼みに由って、いろいろと与兵衛に意見をするシッカリ者、いかにも大阪の女性らしい所が見え、在来の近松の作に出て来る世話女房に比べて、一層濃厚に大阪女の色彩が描かれているようである。

(七) 風俗習慣通語並に新町廓局の事其他

例に由り本文に描かれた風俗習慣通語など、及び新町廓の局其他等を左に摘記する。

□野崎参り……………北河内野崎観音参りの行事は、近年までも続いた古い習慣で、途上、船と陸とで罵り合う奇風があって、如何に罵倒されても怒ってはならぬと云う不文律が能く守られていた。米国のフールデー（嘘を付く日）と比べて面白い対照である。この奇習を利用して与兵衛と会津の客との格闘を描いた事は、前記（第二項）した通りである。（本文上巻参照）。

□同上の道筋……………大阪からの水路参詣道筋は、城北鯉江川（片町と網島の中の川）を上って寝屋川へ出たものであった。（同上）

□ちんつ……………男女二人連れの睦じい様を云うた俗語で、本文にも『行くもちんつ、帰るもちんつ、又来る人もちんつ云々』とある、男女の特に親密なのを『ちんちん』と云う大阪の方言がある。（同上）

□ぶぶ……………茶の俗称、女子供や色町での用語。（同上）

□坊主持……………携帯の荷などを交代に持ち合う時、坊主に出会う毎に、持ち人を代えると云う方法を称したもので、此時代にも既に行われていた事がわかる。（同上）

□者……………役者芸者など、黒人を称して『者』と云うこと、今の『それ者』の菓など云うと同巧の通語。（同上）

□縞縮に鹿の子帯……………桔梗染の腰変り帯の風俗は、廓の人、者の人じゃとある。（同上、お吉が茶店にて往来の人を品評する条参照）

□役者の噂……………甚左衛門（大和山）幸左衛門（竹島二代目）四郎三（桜山四郎三郎）のことは、上巻に、文蔵（佐川）の噂は下巻の本文に出ている。

□山上講……………大和大峰山登山の山上参りの講社が盛んであったことが書かれている。（前記解説第二項及び本文中巻参看）

□坂迎え……………山上参りの人々が無事帰坂を、坂迎えと称して、天王寺の南、桑津の地まで出迎いに往いた習慣があった。（同上）

□日親様……………当時日蓮宗の日親上人崇拜熱が盛んであったらしい。（同上）

□端午の節句と節季……………五月五日は端午の節句の祝い日、その前日（四日）が節季になっている、四日に諸受払をすまして、五日は朝からお礼廻りに出かけたものであ

る。(下巻本文参照)

- 年寄五人組の制度……旧幕時代の市制の一つ、年寄は町々に置かれた区長のような役柄、五人組は四戸乃至六戸を一組として選出された代役人、土地家屋の売買、家督相続などには必ず五人組の連印を要したものである。(同上)
- 内貸借……同業者の間で、商品の貸借融通を御互にする商習慣のこと。(同上)
- 水無月夏神楽……六月は祭り月、廓の紋日月。(同上)
- 廓四筋……新町の廓の四筋を云う、北から南へ順序に数えると、第一筋(阿波座と其西方の九軒佐渡屋町)第二筋(瓢箪町)第三筋(越後町と其西方の佐渡島町)第四筋(吉原町)の以上四筋となる。(同上)
- 遊客の品種……紋日の失費を吝んで変替するしみたれ客、男氣ぶる大尽客、コッソリ忍ぶ茶屋の客、一座遊びの客、ぞめき客、田舎客、馴染客、振舞客など、遊客の品種を分解して描き立てている。(同上)
- 新町局の作り……局は何れも同じ構造で軒を並べている、そして客の現に在る局は、戸を鎖してあったことが本文に示されている。(同上)
- おしゃれの禿……手に嵩高な文を持った禿が来る、侍に物を問われて答えた揚句に、『コレお侍様、左の足あげさんせ、ソレソレ又右の足も上げさんせ、ヲヲようあげさんしたいかい世話の』と、弄ってぴんしゃん行き過ぎるとある、当代の小女郎や禿の拳動が能くわかる。(同上)
- 檢非違使の別当大裡の庁の官人……実は町奉行与力同心などの事である、徳川幕府を憚って、こんな珍妙な時代錯誤を超然として書いている。(同上)